

宮崎市定著

九品官人法の研究 科挙前史

宮崎博士は多作の人である。少くとも東洋史畑では第一級の生産者である。単行著書も今度ので十冊を数えると思う。生産性が高いばかりでなく、その質もきわめてユニークである。今度の書物は、直接にはこの数年來、文部省科学研究費の補助をえて発行された「中国制度史語彙」の整理の一つのまとめとして公表されたものではあるが、それから想像されるような無味なものでは決してない。副題に「科挙前史」とあるから、前著「科挙」と対するものであろうが、かつて、いや今も学界に刺戟を与えつつけている好著「東洋的近世」にそそえて「中国的中世」と呼んでもよさそうな内容である。著者もこの書物の題名についてはいろいろ思いめぐらされたことが、はしがきによつてうかがわれる。或は「六朝貴族制度の研究」、或は「流品の研究」

というように。あげくのはて今の題名になったのだが、これは少し耳なれない。が実は今まで東洋史の教科書にも出ている「九品中正」のことなのである。AD二二〇年、漢魏革命の直前に、登用すべき官吏を一品から九品までに序列づけた、陳群制定のあの制度のことなのである。それでは何故「九品中正の研究」という通りのよい名にせず、あえて聞きなれない「九品官人法の研究」と銘打つたのだろうか。実は両者の関係については、今まで学界においてとかくの論議があつたのである。たとえば、かりに二品と格付けされた人が、直ちに二品官に就任できたかどうか。歴史の事實はそのようには答えてくれないから、資格審査官である中正の格付けする九品と、官位の上での九品とは全く別物であるようにでもある。といつて両者を無関係としてしまうのも気がかりである。げんに唐長孺氏の「九品中正制度試釈」(魏晉南北朝史論叢)所収、一九五五年刊)などは、中正の品第は単に褒貶の虚名ではなく、就職のコースと不可分の関係のあるもので、官位は必ず品第と相符合するものだとかえし強調するのだが、さてそれではその符合関係は具体的にどう

うだということになると、あまりはつきりしない。わが宮崎博士はこの書において、このもやもやしていた中正の品第と官位の九品との間に明瞭な関係のあることを定立した。著者の言葉を借りれば、前立(九品中正)の裏にかくされていた本尊秘仏(九品官人法)を開雇したのである。中正の与える品第はその上限を示すもので、それから四等さげた官位で任官するのが原則であつた。たとえば中正が二品と格付けした人の初任官位は六品で、そのご累進して二品にまで達しようというわけである。聞いてみると至極あつけないことだが、これは単なる思いつきではない。はじめて官に就くことを起家または積禍というが、当時の人の起家の官位と中正の品第とを、史書の中からこくめに探し出して、遂に両者の間にある関係を發見するに至つたのである。「この事なども当時の社会にあつては特に言うを要せぬ分りきつたことだつたであらうが、時代が変るとそれが最も分らないものになつてしまつた」(はしがき)ものではある。しかし「書いてないことは信じない」(無微不信)という清代考証字の手堅さだけではどうしても到達しえない境地でもある。

上述の關係を定立するに至つた事例は極めて数少いので不安がないでもない。しかしこれを任子の例に照合すると、次第に確からしさが増してくる。任子というのは、高官の子弟が、父兄のおかげで任官することで、漢代から見られる制度である。漢代では父兄が二千石すなわち公卿に相当する身分に上つた者は任期三年に滿つると子弟一人を、その才能を保證して郎とすることができるのである。これを魏代、九品官人制時代についてみると、ある人の初任官品とその当時における父の官品との間に四等の差（一品官の子の初任官品は五品の如し）のあることが見出される。このことから、さきの中正品第と起家官品との關係の確からしさが分るとともに、九品官人制のもつ意味がかぎ出されるのである。官僚となるべきものの才能と德行を公平に評価審査するのであるから、合理的な官吏登用制のように受け取れるのだが、父兄の獲得した地位を、何等かの形で子弟に伝える任子の制を抱合しているのを見れば、特権階級の温存をねらつた制度といわなければならぬ。事実、その後この制度はいよいよ貴族主義化していくのである。九品官人法の本質

は、やはり貴族的選挙制度なのである。

この書物は、この九品官人法の起源から、隋の開皇年間にこの制度の廢止されるまでの四世紀間、いわゆる六朝時代における官吏制度の変遷を精密に追跡したものである。はじめに「漢より唐へ」と題する緒論（とはいいいつて包括される）があり、本論の要点は一条、二十二節、七十頁に及び、本論の要点はすべて包括される）があり、本論は漢代制度一斑、魏晉の九品官人法、南朝における流品の發達、梁陳時代の新傾向、北朝の官制と選挙制度の五章より成る。さらにそのあとに、「再び漢より唐へ」と題する餘論がつづく。さきの「漢より唐へ」が時代を追つて述べられたのに対して、ここでは官僚制と貴族制、貴族と豪族、士人と胥吏、南朝と北朝、中正と科挙という五問題をとりあげて、本論の所説を浮彫にする。

著者の見解によれば、漢帝國は中国史上に始めて確実に全国的な支配権を樹立した王朝ではあるが、その大統一の中に古代都市國家的要素が清算されずに残っており、貴族主義も官僚主義も十分には成立していなかつた。その統治のための官僚制度も、それぞれ独立した官長の集合体だといえる。そして一おう

形式だけを整えた官僚制は順当な發達を見ず、却つてその下から貴族制が發生して来て意外な方向に發展を遂げ、官僚制が貴族的に運営される結果（士庶の斷層、秀才孝廉制の門閥化傾向）を招いた。九品官人法はこういう時勢を背景にして出現したものである。魏の九品を漢の俸秩と對比すると五品以上が公卿大夫、六品以下が士に相当する。この五品・六品の線を以て、著者は官僚線とよぶ。そこが貴族化が進むと門地二品という貴族階級が成立し、従つて起家官が多く六品であるところから六品・七品の間に太い線が引かれるようになる。これを貴族線とよぶ。それと同時に、官品の上下だけではなく、同じ官品の中での優劣（清濁）が問題になつてくる。かくて南朝の宋齊時代の官僚ピラミッド構造は變化を來し、門地二品の清官、門地二品に非ざる寒士の就きうる官、庶民寒人の就任を許された勳位に区劃される。ついで梁代になると、貴族線以上すなわち六品以上が正從九品、十八班（正一品が十八班、從九品が一班）に小分され、この流内に対して七品以下の三品が流外七班に分けられる。それぞれさききの門地二品と寒士に対応する。さきの勳位は三

品階位・三品階位より六品階位までの五等に
分かれる。この流外階位が胥吏に当るのであ
つて、胥吏という言葉もこの時分から用いら
れるようになったらしい。またこの三グルー
プの外に全く独立した將軍号がある。流内十
品二十四班百二十五号、流外八班十四号とい
うおびただしい数で、前代以来の將軍号イン
フレーションを制度化したものである。この
ような貴族主義の集積をみる一方で、学校・
試験制度が出現して官僚主義への新傾向が看
取される。そして流内九品の中でも三・四品
および五・六品に線をひくようになる。いわ
ば新官僚線があらわれて来た。眼を北朝に転
ずると、氏族制を脱した北魏は、天子は官僚
制、北族有力者は封建制、漢人貴族は貴族制
を望んだが、結局は南朝の貴族制に近いもの
となつた。ついで北齊はやはり南朝に追随し
ようとしたが、北周は之に反して貴族制度を
排撃した。隋は北周の後をうけ勇敢に貴族主
義に対決し、門地による任官を排して、個人
の才能本位で官吏を登用することを強行し
た。即ち中正の廃止と科擧の成立である。科
擧は漢代の秀才・廉制度と相似たものであ
る。しかし漢代の秀才は貴族主義の攻勢の前

に降服しなければならぬ貧弱な制度であつた
が、隋唐の科擧は貴族主義を克服する逞しい
生命力をもつた制度であり、ほとんど次元を
異にするものであつたと言ふ方が適當であ
る。ひろく言つて、漢は貴族制の胎生期であ
り、唐は貴族制の没落期に当る。そして両者
に挟まれた中間の貴族制時代は、中国史上に
特殊な位置を占め、その後と併せて優に一
時代として独立せしむるに足る価値がある、
と著者はいう。

本文のほか補注が五十八項、それぞれが
小論文になりそうなものばかりである。ここ
で一寸口を挟ませて頂く。第六項の郷品とい
う語、この補注では、「どうも史籍に見当ら
ないようである」とある。唐長孺氏の前掲論
文を見ていて気付いたのであるが、世説新語
の尤悔篇に、温嶠が老母をふり切つて南去し
たので「迺於崇貴、郷品不過也」とある郷品
はこの中正の品第に当るのではなからうか。
補注の次には参考文献が、その後には詳密な
制度史用語索引がつづく。また本文中には理
解に便するために魏晉、宋齊、梁陳、北魏、
北齊・北周・隋の官僚ビラミッド構造図と漢
代孝廉数より魏晉南北朝士庶線変遷表に至る

四十二表を収める。さらに新機軸は、引用の
漢文にすべて懇切な日本語訳を附したこと
である。全くかゆい処に手をといた作品であ
る。も一つの新趣巧は扉で、題字は著者自
筆、篆印は隴齋居士の刻するところ。なか
か雅なものである。(A5本文五八一頁、制
度史用語索引二八頁、定価一一〇〇円、東洋
史研究会刊、東洋史研究叢刊之一)

—森鹿三—

田中秀作教授 地理学論文集
古稀記念

本論文集には二十三篇の論攷が寄せられて
いる。その半ば近くは植民・開拓および集落
に関する研究によつて占められている。田中
秀作教授のライフワークは周知のごとく植
民・開拓地理であつた。

しかし田中教授の既応の業績たる数十篇の
論文のテーマは、植民・開拓地理の埒内にと
どまらず、ひろく自然・集落・経済・交通・
人口 *pop.* にわたり、本書二十三篇の研究対
象の殆んどすべてを蔽つている。即ち田中薫
教授は「田中先生とのつながりを水河問題に
見出して」、水河に関する稿を寄せられ、位